

ブレンド型講義の教材開発を通じた創意工夫と諸課題

～教育総論を事例として～

Inventive Ideas and Issues through the Development of Teaching Materials for Online and Face-to face classes Blended Learning
—In Terms of the Principles of Education—

浅田 豊
Yutaka ASADA

青森中央短期大学非常勤講師, 青森県立保健大学健康科学部栄養学科准教授
Aomori Chuo Junior College, Aomori University of Health and Welfare

Key words ; ブレンド型講義 教材開発 教育総論

1) はじめに

昨年度に続き今年度の教育環境においても、きめ細やかな感染予防対策を行う中で、受講者の主体性ならびに利便性、最大の教育効果のすべてにバランスの良い配慮を施した、ハイブリッドの観点からの講義運営の検討を含む、一層の創意工夫が必要とされた。昨年度考察した、多様な組み合わせパターン教材づくりをさらに一歩進めた、何通りかの授業運営形態との関連の中での、さらなる教材開発が、教育総論担当教員へ期待されていると捉えて、自然である。

そこで以上をふまえ本稿では、今年度並びに従来の年度のティーチングポートフォリオをもとにした、教育総論における工夫及び課題に関し、ブレンド型講義をはじめとする新たな形態における活用の観点を中心に、比較に基づき明らかにしていくことを目的とする。

2) 新たな授業形態の比較の視点からの教材開発の工夫

教育総論の30時間の各単元計画のうち、教育の本質を学ぶ段階では、子どもたち自らがなぜ学び、何を体験し、学んだことを社会でどう生かすどのような生き方をするのか。そのためにはどのような手順で系統的に学んで行けばよいのか、という点について考えることを、側面から支援できるような教師を目指すための、教職コース履修学生としての興味関心や学問的好奇心を高めることにつながる、教材の工夫が不可欠である。そして、子どもたちの成長発達を支援する家庭はどのように子どもと関わり、教師はどのような教育観と使命感をもって一人ひとりの子どもの個性と向き合っていくのか。また学校は地域社会と連携しチーム学校を効果的に形成しつつ、社会教育と学校教育はその連動を通じてどのような環境を子どもに提供していくのか。このような観点から、現代の教育課題を発見

し、理論的知識を適用しながら、その解決や政策の方向性を提案できる思考力を、学生の内面に育む、教材の展開が必要である。

したがって表1にあるように、授業の形態がブレンド型、反転型、ハイフレックス型、分散型とどのような形態をもつ場合でも、授業時間と予習復習の時間が効果的に接続されることを満たし、情意や認知の力が育まれなければならない。

3) 新たな授業形態の比較の視点から見た教材開発上の重点事項

次に、家族と社会による教育の歴史や近代教育制度を学ぶ段階では、社会の発展の各段階において、教育的営為はどのような場でどのような内容のもとでなされていたのか。またその時代の社会背景が教育活動へどのような影響を与えていたのか。そしてそのことが子どもたちの人間形成にどのように関係していたのか、という点をすべての学生が自律的に構成できるような教材の工夫が求められる。

こういった点に加え、教育制度の根本には、自由・平等・博愛の精神を背景とする、無償・義務・世俗化という視点があるということ。即ち、平和を目指す教育、民主主義社会をつくる公民的資質の形成、すべての人々の人命と人権を尊重する心情と実践力、といった観念の意義を、学生にとって身近な生活環境や今日の地域社会の課題と結び付けながら考えを深め、議論につなげることができるような、教材の重点事項化が必要である。この内容知として重点化された事項は表2にある通り形態がいかなる型に換わっても、物事の調べ方や問題の発見、知識の適用、結果のまとめ方などの方法知、各学生の動機づけの持続、教育総論の学修状況に関する自己観察力と密接につながったものにならない。

4) 新たな授業形態の比較の視点から見た教材開発上の課題

さらに、家庭での教育や学校での学習活動に関する日本ならびに西洋の教育思想の柱となる、子どもという存在を我々はどのように捉えるべきか、教育が内包すべき目的や内容、学校が果たすべき役割、学校を補完する地域・家庭での役割、どのような教授・学習過程が望まれるか、どのような働きかけが学力向上につながるのか、といったような観点を、各学生が今日行われている日本並びに世界の教育活動・教育改革の特質と結び付けて理解することを、助ける教材が必要とされる。

そもそも何のために思想は導出されるのだろうか。より良い教育活動を目指し、人格の完成に各々が近づく中で、自分の個性を発揮し周囲と協力して、我々が暮らす社会の成熟に貢献できる力を身に付けるためであり、その指針を示すためであろう。そして今日の社会の課題である、自由と責任、科学的創造性と倫理性、健康増進と経済生活、資本の展開と生活の土台における公平な保障、道具的思考と技能的・問題解決的思考、自助と相互扶助、これらすべてのバランスを、学生自らが考えることにつながるならば、思想は有意義である。と同時に教育総論の中でそのような思考、表現を進めるにあたり、最適化された教材が存在するべきである。この単元は内容的にも難易度が増し、さらには表3にあるように、手順・方法としても、思想を援用し教育活動における各課題への解決策の導出、次なる教育課題との接続というプロセスは、受講学生にとっても十分な学習時間と理解の定着がなければ、決して簡単な部分ではない。よって、社会の感染状況を踏まえ、対面式講義の場合でも、表3の四種類のいずれの実施形態となった場合でも、教材が十分に備わっている体制が、教育総論には求め

られている。

5) おわりに：今後に向けた展望とまとめ

本稿では、昨年度の前稿では未着手であった、未解決の問題への考察を進めた。今後も引き続き開発していかなければならない教材の単元は、学校生活や子どもの実態、社会に開かれた教育課程、地域と学校との協働、学校や子どもの安全などの地域社会における諸課題と制度や思想、教育の本質とを結び付けた教育論を、学生自らの考察と議論で深化させることにつながる、新しい主題に符合する内容である。即ち、普段の日常生活をより良いものとするために、学校を中心とする場で習得する体系的な知識や技能はどのように活用されるべきなのか、あるいはすべての子どもたちに豊かな自然・社会・文化体験を提供するためにはどのような教育計画が求められるのか。こういった問いに各履修学生が自主的に向き合っていけるような、段階的な教材開発が求められる。今後も教育総論における授業運営の理論的枠組みを考察するとともに、実践につながる研究を深めていきたいと考える。

6) 文献

- ① 文部科学省 (2021年) 「令和3年度後期の大学等における授業の実施方針等に関する調査の結果について」
- ② 文部科学省 (2021年) 「オンライン授業に係る制度と新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査」
- ③ 文部科学省 (2020年) 「コロナ対応の現状、課題、今後の方向性について」

表1 新しい四形態ごとの、教育総論の教材開発・活用上の工夫

教材づくりと学習支援過程	ブレンド型	反転型	ハイフレックス型	分散型
予習復習内容の発出	15 コマを通じて、体系的に編集した資料の事前配布。	録画動画に付随して添付する資料集と、録画内容とが相互補完するように編成する。	自作の独自の問いを含む、各コマの資料を各コマの事前に、共通して全員へ渡るように送付。	メールや共有フォルダ・クラウドなど、利便性が高く理解しやすい手段で発出。
予習復習時の質問への支援	電子付箋での提出も可能な掲示板を設置し、質問への補足を履修者全員一斉と、個別的支援の両面で行う。	各履修学生の、予習復習の時間計画、ペース、順序性や組み立て方、を個別化しきめ細やかに支援する。	対面とリモートの両グループからの質問に対し、必要な追加文献をメールにより紹介する。	対面とオンデマンドの両グループへの事前課題への指導の総評を全受講者へフィードバックし参考にしよう。
内的関心の醸成	リモートに入った時に、ツールとして活用ができる、電子図書や電子論文を紹介する。	課題をテーマ・分野ごとに選択できるように、幅広く準備しておく。	両グループ間でも、テーマへの関心を伝え合わせ、共有させる。	両グループへ、授業前に、参考文献リストと調べ学習の進め方ガイドを配布する。

表2 新しい四形態ごとの、教育総論の教材開発・活用上の重点事項

教材づくりと学習支援過程	ブレンド型	反転型	ハイフレックス型	分散型
自発的自己学習・相互学習の推進	リモート時、発表を電子ホワイトボードや電子模造紙で行うように、課題と発表を接続する。	対面時に導出された、自主的な課題と次の回の事前学習動画とを接続する。	学生個人が、自分で何をどのように調べていくかについて、考えさせ、結果をレポートさせる。	対面時はノートチェックを重視し、オンデマンド時はミニレポートへの添削を重視する。
問題の発見	リモート時、お互いに発見した問題を、チャットで共有する体制を組む。	録画の内容から問題を発見させ、対面での議論へとつなげる。	問題の整理と比較に関し、板書を活用してまとめ、両グループへ、思考の深化を促進する。	対面時には、発見学習と有意味学習を重視し、オンデマンド時には、プログラム学習を重視する。
用語や事実、概念の正確な理解と定着	リモートでの確認テストの解説を、対面時に行う。	獲得知識に関し、お互いに説明する場面を設ける。	チャットでの形成的評価を、両グループで共有する。	対面時は学生相互に筆談による添削を行い、オンデマンド時はTAが入る場合にはフィードバックを受ける。
知識の適用	お互いのミニレポートを電子上で読ませ、学びを共有する。	学問的揺さぶりをかける問いを、班の進度に応じて複数段階で準備する。	実体験と学習内容とを比較した結果を、両グループから発言させる。	対面時は筆談の模造紙をポスター発表させ、オンデマンド時はレポートの添削結果を個々へ返す。

表3 新しい四形態ごとの、教育総論の教材開発・活用上の課題

教材づくりと学習 支援過程	ブレンド型	反転型	ハイフレックス型	分散型
解決方策の導出	解決方策の発表をリモートで行い、聞くことからのひらめきを、お互いに持たせる。	模造紙への付箋へ、ペン書きした形で、筆談を中心とした議論を深める。	ブレイクルームへ教員が巡回的に入り、支援していく。	対面時に解決方策を導出後に、次回には応用問題をオンデマンドで学ぶ形とし、両群を同じ進度にし、フォローアップも行う。
継続的自己観察・省察	対面とリモートでのノートをつなぎ合わせ、内面変化の過程をつかませる。	個々の学生ごとの、メタ認知の力の育ち方をノート等から把握する。	対面参加学生もタブレットかスマホ等があれば、両群で省察内容を共有する。	対面時はポートフォリオを確認し、オンデマンド時は質問内容を写真添付等で提出させる。
次なる課題との接続	最後の回を対面とし、個別性の高い援助を進める。	進度に合わせて段階分けした、資料付き動画を作成しておく。	チームスなどを活用し、共有画面において、課題進捗をお互いに見守る。	全員が個別にアップできるような、チームスなどにおける課題提出場所を用意する。